

合科的指導の推進

足利市立相生小学校 田部井三枝子 田部井真純
石島 尋子 久保 敏邦
本島 慶子 小堀 伸之
石黒 清治

1. はじめに

本校では、昭和55年度新指導要領実施と同時に「授業の質的転換を図る」という視点に立って、教科指導のあり方をもう一度検討しようということになった。

そこで、「足利市立研究所報 第42号 ゆとりと充実を考えた教科指導のあり方」をテキストとして、現職教育の一環として何回か勉強会をもった。そして、その中に示されている「①主体性を育てる学習 ②豊かで生き生きした学習 ③ひとりひとりの児童に即した学習」を推進するために、本校としては、どのような角度・方法で研究・実践すべきか、について検討が加えられた。

その結果、次のような研究主題が設定された。

「小学校学習指導要領」に示された内容に従い、本校の教育目標「よく見、よく聞き、深く考える子供」の育成を目指し、それが、1時間1時間の授業の中で、意図的・計画的に実践できよう努力する。

これを実現するために、職員の総意によって内容を焦点化し、次のように研究課題を設定した。

研究課題 学習指導方法の工夫改善

—学習意欲を高めるための教材の吟味と提示の工夫—

更に、研究内容を焦点化し、具体化するために、低・中・高のブロックに分け、それぞれに、ブロックとしての研究内容を設定して実践研究を進めることにした。

- 低学年ブロック —— 豊かで生き生きした学習を目指した合科的指導の推進
- 中学年ブロック —— 児童が主体的に取り組む学習を目指した協力教授の推進
- 高学年ブロック —— 個に即して学習の個別化を目指した指導過程の改善

以上のような研究課題で研究を開始したが、途中でいくつかの改訂を行った。昭和58年度は、ブロック構成、研究内容を次のように改訂した。

- 低学年ブロック（1～3年）—— 豊かで生き生きした学習を目指した合科的指導の推進
（ブロックの構成は従来の学年に3年を加え、内容は変らず）
- 高学年ブロック（4～6年）—— 個に即して学習の個別化を目指した指導過程の改善
（ブロック構成は従来の学年に4年を加え、内容は変らず）
- 特殊教育ブロック —— 障害の実態に応じた交流教育の推進（57年度新設）

以上、研究内容の改訂について概略を紹介したが、それは、以下に述べる「合科的指導の推進」の、本校としての研究の位置づけをはっきりさせるためである。

2 研究の経過

(1) 研究課題及び研究の内容（再掲）

研究課題 学習指導方法の工夫改善

— 学習意欲を高めるための教材の吟味と提示の工夫 —

低学年ブロックの研究内容 豊かで生き生きした学習を目指した合科的指導の推進

(2) 研究内容についての基本的な考え方

過去数十年間にわたって実施されていた教科学習は、低学年、特に入門期においては、就学前の教育の延長という点から考えると、児童の心身の発達段階からして、あまりにも飛躍が大きすぎるきらいがあった。そこで、新指導要領の精神にのっとり、知的理解の先行を打破し、次のようなことがらをねらいとして、指導計画の改善を図ろうと考えた。

- ア 児童のくらしの中で、なまのことがらをできるだけとりあげて学習させる。
- イ 実践的な活動を中心にして、生産的活動や遊びを重視した、体を動かす学習をさせる。
- ウ 友だちと共通のめあてをもち、協力して問題解決を図る学習をさせる。
- エ 興味・関心を純化させるような、しかも楽しい学習をさせる。

結局、生活体験を重視した学習をとり入れるということである。これは、すなわち教科の枠をはずして体験的、総合的に学習をさせるということになる。

(3) 第1期（昭和55年度）

第1期はいわゆる準備期間である。授業研究の実践そのものにはいたらず、指導要領及び指導書に示されている内容の検討、先進校の研究の分析が研究の中心であった。

その結果、指導計画作成の基本として、次の4つの方法があげられた。

- ① 計画の段階では教科別に作成し、授業展開の際に、類似の教材、または合せて指導した方が効果的であろうと思われる教材を組み合わせ合科的指導として扱う。
- ② 組み合わせ合科的指導した方が効果的であろうと思われる内容を抽出して、合科的指導として年間計画を編成する。
- ③ 特定の学習内容(学習活動)を設定し、その活動から、どの教科のどのようなねらいが達成できるかを検討し、総合的な学習として年間計画を編成する。
- ④ 教科を解体し、地域の特性、児童の実態に即した学校独自の教材の再構成をする。

研究の初歩的な段階としては、従来の教科学習からあまりにもかけはなれている③④は抵抗が大きすぎると思われる。また、①では、その場の思いつきで授業が展開されるのではないかという懸念が生じた。

結局、②に焦点がしばられ、社会・理科を中心として、関連のある他教科の教材を選択して、次のような合科的指導の単元を設定した。

◎ 1年生の合科的指導計画

月	単元名	関係教科
4	がっこうたんけん	社 理 学指
5	うさぎとあそぼう	理 図 体
7	なぜでうごかす	理 図
9	わたしのうちのあるところ	社 図
10	いしであそぼう	理 図
10	かぞくのせわ	社 国 図
11	じしゃくであそぼう	理 図
12	かげうつし	理 体 図
1	ごむでうごかす	理 図
2	きせつとくらし	社 図

◎ 2年生の合科的指導計画

月	単元名	関係教科
4	みせではたらく人たち	社 国 図
6	空気であそぶ	理 図
6	いねをそだてる人たち	社 国 図
10	虫をさがそう	理 図
10	工場ではたらく人たち	社 国 図
12	おもりで動くおもちゃ	理 図
1	音あそび	理 図
1	のりものではたらく人たち	社 図
2	ゆうびんをはこぶ人たち	社 図
3	豆でんきゅうをつける	理 図

(4) 第2期(昭和56年度～昭和58年度前期)

第1期に作成した合科的指導の計画を検証する段階である。研究授業を通して、この計画が所期のねらいを達成し得るかどうか解明しようと試みたわけである。

ア 1年生の授業研究

- うさぎとあそぼう 昭和56年6月24日

授業者 1の1 田部井三枝子 1の2 安藤 成子

理科「えさやり」体育「模倣（おうちの動物）」図工「どうぶつをつくる」3教科の合科である。

2組は4時間扱いの1時間目で、理科と体育を中心として授業を展開した。うさぎの体や動きの特徴を観察しながら、その動きを身体表現するという学習活動である。

1組は3～4時間目をあて、観察、身体表現をもとにして、更にうさぎを目の前にしてその特徴をとらえ、粘土で表現する活動である。

- いしであそぼう 昭和56年11月11日

授業者 1の2 安藤 成子

理科と図工の合科である。川原へ行っての石集め、集めた石の自慢ごっこを通して、遊びながら石の特徴をとらえ、造形活動への意欲をもたせる。更に、できあがった石の造形作品を売買するというこで、お店屋さんごっこの活動もと入れた。

- かぜでうごくおもちゃをつくろう（かぜでうごかす） 昭和57年7月14日

授業者 1の2 久保 敏邦

理科と図工の合科である。図工教材、風を利用した動くおもちゃ（風車）を作ることによって、よりよく動くしくみを工夫させる。この活動を通して風の動きに気づかせる。

- かぜでうごかす 昭和58年6月24日

授業者 1の1 田部井真純

前項と同じ単元であるが、ここでは、図工教材「つないであそぶ」と関連させて指導した。つないだ風輪がどのような動きを示すか、どのようにすればひらひらとうまくなびくようになるかを工夫させ、風の動きに気づかせる。

イ 2年生の授業研究

- 空気であそぶ 昭和56年6月24日

授業者 2の2 久保 敏邦

理科「空気であそぶ」図工「うごくおもちゃ」の合科である。1年生の「かぜでうごかす」の発展として、空気存在、特性をとらえ、それを応用して動くおもちゃを作ろうという学習活動である。

- 工場ではたらく人たち（パン工場ではたらく人たち） 昭和56年11月5日

授業者 2の1 安倍 裕子

社会、図工、国語の合科である。パン工場を見学して、その様子を絵や文にまとめる。更に、それぞれの分担を決めて、段ボールなどの廃材を利用して設備機軸の特徴をとらえて模型づくりをする。そして、パン工場ごっこの学習活動を通してパン工場のしくみを体得させようとするものである。

- 工場ではたらく人たち（パン工場ではたらく人たち） 昭和57年11月30日

授業者 2の1 小堀 伸之

前項と同じ単元であるが、ここでは、絵画表現、文章表現して発表するという指導を

前面に出して授業を展開した。

ウ 3年生の授業研究

3年生は、昭和58年度に新たに加えられた学年である。低学年の「遊び」を重視した総合的な学習から、高学年の分科した教科学習への移行期間を設けたら、という趣旨のもとに加えられたものである。そのようなわけで、今年度は、特別の指導計画は編成せず、(3)①の考え方をもとにして研究授業を実施することにした。

○ かんさつしたこと 昭和58年6月24日

授業者 3の2 小堀 伸之

理科「へちまのかんさつ」国語「かんさつしたこと」の合科である。観察したことがらを(理科)どのように記録すれば(国語)正確に読み手に伝えることができるかをねらいとして授業を展開した。

(5) 第3期(昭和58年度後期)

昭和58年度に作成した、合科的指導計画に従って実施した授業は、それぞれ、それなりに有効であったと思われる。しかし、前述のすべての授業が、合科的指導の基本的な考え方に照らして満足のできる学習活動ではなかったようである。

そこで、第3期は、次年度の指導計画改善の資料を得るという立場から、既成の年間指導計画にとらわれず、自由な発想のもとに、実験的な授業を展開してみようということになったわけである。

ア 1年生の授業研究

○ おみせやさんごっこをしよう 昭和58年10月14日

授業者 1の2 田部井三枝子

まず、学習活動「おみせやさんごっこをしよう」を設定し、この指導の中から、どの教科のどのようなねらいが達成できるかを検討して、図工、算数、国語のねらいをひきだし、授業を組み立てたものである。

イ 2年生の授業研究

○ 虫になろう 昭和58年10月14日

授業者 2の1 石島 尋子 2の2 久保 敏郎

理科教材「虫をさがそう」の発展として組み立てた授業である。児童ひとりひとりの個性に応じて、身体的表現、造形的表現、音楽的表現、文章の表現などの創作活動を行い、その発表会をすることを通して、更に虫に親しもうという学習活動である。

ウ 3年生の授業研究

○ 友だち 昭和58年10月14日

授業者 3の1 本島 慶子

道徳「信頼友情」を中心として組み立てた授業である。道徳の主題を明確にし、関心を高める手段として、国語「詩を書く」音楽「友だち」をとりあげて、それぞれの教科のねらいも達成させようとしたものである。

3. 研究の実際

(1) 第2期の実践から

第2期は、研究の経過でも述べたように、第1期で作成した合科的指導計画が、所期のねらいを達成し得るかどうか、授業の実践によって解明しようとした段階である。

紙面の都合で、実践例については省略し、それから得られた結果についてのみ、略述する。

ア 効果的であった学習活動

図工科における造形活動が、理科的な思考によって更に助勢され、また、よりよい造形作品ができることによって、理科的な思考も深まるというような学習活動については非常に有効であった。

「かぜでうごくおもちゃをつくろう」などはその典型である。風車を作ることによって風の存在に気づき、羽根のしくみを考える。そして、どのようにすればよく回る風車を作ることができるか、ひとりひとりが試行錯誤をくり返しながら、よりよい作品を完成させる。児童の興味関心も持続して楽しい学習となり、しかも、理科と図工科のねらいが相乗的に達成された単元である。

その他、これと同じように効果があげられた単元は次のようなものであった。

- うさぎとあそぼう(1年)
- いしであそぼう(1年)
- 空気であそぶ(2年)

イ 効果的でなかった学習活動

社会科における見学、理科における観察、これらを国語科における見学記録、観察記録、図工科における絵画表現と組み合わせた指導は、期待したほどの効果をあげることができなかった。もちろん、これには指導方法、指導技術の未熟さもからんでいると思われる。しかし、そのことだけで簡単にかたづけられない要素も含まれているようである。見学した内容、観察したことがらを整理して、文章表現、絵画表現するという活動は、低学年の児童の発達段階からして要求が高すぎたようである。

「工場ではたらく人たち」は学習活動を変えて2通りの研究授業を実施したが、その結果は対照的であった。廃材を利用して模型作りをした授業は、児童が意欲的に学習活動に取り組み、活発に展開されたのに対し、文章表現、絵画表現を中心にした授業は、児童の学習活動が萎縮しがちであるという結果が出た。

(2) 第3期の実践から

第2期は、合科的指導年間計画に基づいた授業を実践することによって研究を進めたわけ

であるが、この計画は、やはり机上のプランであって、実践にはそぐわないものも見られた。関連があるだろうと思われる教材を組み合わせる単元を構成したつもりではあったが、実際に授業を展開してみると、1時間1時間の授業は単独の教科の指導と同じで、単元全体として、ただ一つに組み合わせるに過ぎないと思われるようなものがあった。また、合科にしたことによって、一方の教科のねらいを達成しようとする、もう一方の教科のねらいが、児童の発達段階より程度が高過ぎて、楽しい学習にはなり得なかったものも見られた。

そのような反省に基づいて、年度の途中ではあったが、合科的指導について、その根本からも一度考え直そうということになった。その結果、指導計画の改善という立場から、すでにできている指導計画から離れて、もっと自由な立場から、合科的指導の単元を構成しようということになった。

以下に紹介するのは、新しい試みとしての三つの例である。

ア 学習内容を設定し、その活動から、どの教科のどのようなねらいが達成できるかを検討して構成した単元

(ウ) 指導案(抜粋) 1年2組 指導者 田部井三枝子

① 単元名 おみせやさんごったをしよう

② 単元設定の理由

低学年の児童は「ごっこ遊び」が大好きである。お祭りや夜店などへ行って、いろいろな物を買ってもらった経験があり、お店の種類、そこで売っている品物などもよく知っている。また、お小遣いなどを使った経験から、簡単な金銭の計算にも興味を示してきている。そのようなことから、この単元を設定した。

この単元からねらえる教科、指導内容は次のようなものである。

- 国語 ・ はっきりした発音で話すこと。 ・ 経験した事の順序どおりに話すこと。 ・ 話の内容を正しく聞きとること。 ・ 経験した事を順序をたどって書くこと。
- 算数 ・ 加法及び減法が用いられる場合を知り、簡単な場合の加法及び減法ができること。
- 図工 ・ 生活を楽しくするために使う簡単なもの及び飾るものをつくること。
- その他
 - ・ 社会については「小売店の工夫」が関連するが、これは2年の指導内容であるので、この学習では、それに気付いたら簡単に指導するにとどめる。
 - ・ 学級会については、簡単な相談ができること、役割分担を決めて協力してやることの必要に気付く。

③ 単元の目標 (略)

④ 指導計画

総時数 6時間

- お店を開く相談をしよう 1時間
- お店で売る品物を作ろう(売る品物, お金) 3時間
- お店屋さんごっこをしよう 1時間(本時)
- 楽しかったことを書こう 1時間

⑤ 本時の指導 (題材名 ねらい 略)

◦ 展開 (要点のみ抜粋)

具体目標	学習活動	指導上の留意点	評価
友だちとなかよくお店を開くことができる。	1 学習のめあてを知る。 2 お店づくりをする。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ お店の種類別のグループとする。 ◦ 協力してお店の飾り付けの工夫をさせる。 ◦ 品物の値段は100円以下とし、10円単位とする。 ◦ 何屋さんか、どんなものを売っているか発表させる。 ◦ 大きな声でみんなにわかるようはっきりと言わせる。 ◦ 順番を決めて、売り手と買い手に分かれて楽しい雰囲気で購入物をさせる。 ◦ 「いらっしゃい」「〇〇をください」「ありがとうございました」などをはっきり言わせる。 ◦ おつりの計算など、まちがえないようにさせる。 ◦ 何を買ったか、お金は全部でいくら使ったかなどを発表させる。 	(省略)
お店の内容が発表できる。	3 お店の内容を発表する。		
楽しく買物ができる。 お金の計算ができる。	4 買い物をする。		
買った品物が発表できる。	5 買った物と値段の合計を発表する。		
	6 次時の予告		

(イ) 指導の記録 (抜粋)

学習活動	教師の発言(指示・発問)	児童の活動
2 お店づくりをする。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 自分たちの場所にお店を開きましょう ◦ 値段もつけましょう。品物の値段は100円以下だよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ グループに分かれてお店づくりをする。品物を並べる係、看板を出す係、それぞれ用意してあったもので飾り付けをする。
3 お店の内容を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ せっかくお店を開いても、だれも買いにきてくれなかったら 	<p>A ぼくたちのお店は時計屋さんです。</p>

<p>4 買い物をする。</p>	<p>つまらないね。お店の宣伝をしてください。</p> <p>○ もう少しお店のことがみんなにわかるように宣伝しましょう。</p> <p>○ お金はいくら持っていますか。</p> <p>○ お店の人は、お客さんが行ったら何と言いますか。買う時お客さんは何と言いますか。</p> <p>— 中 略 —</p> <p>○ それでは始めましょう。</p> <p>— 以 下 略 —</p>	<p>B ここは小鳥屋さんです。安い小鳥がいっぱいあります。たくさん買いに来てください。</p> <p>C くだもの屋さんです。いろいろなくだものがあります。買った人はくじがひけます。当るとおまけがつきます。</p> <p>(その他宣伝が続く。)</p> <p>全 300円</p> <p>D いらっしゃい。</p> <p>E これをください。</p> <p>○ 売り手、買い手に分かれて活動を開始</p> <p>○ お互いに言うことがわからなくなって教え合う子。</p> <p>○ 買った物と残りのお金を教える子。</p> <p>○ 売り上げのお金を教える子。</p> <p>など、活発な活動が展開された。</p>
------------------	---	---

(ウ) 結果及び考察

◎ 結果

○ 成果

- ・ 子供の実態に即した単元を設定したことによって、教科でねらっているものが引き出せたのと同時に教科学習ではできない活動が展開された。
- ・ 子供の生活体験から、それを大事に取り上げて学習活動が展開されたために、全員が喜んで参加できた。
- ・ 楽しい活動の場が設定されただけでなく、意欲的に問題を解決しようとする姿勢も見られた。

○ 問題点

- ・ 楽しい学習活動ということは、どういうことなのか。どうすれば、表面的な楽しさだけでなく、より楽しい学習になるのか、その掘り下げが必要と思われる。
- ・ 評価は、結果を見るだけでなく、活動の過程において実施しなければならない

が、その観点、方法について更に研究の余地がある。

- ・ このような学習活動を年間計画に位置づける場合、各教科の時数の配分をどのようにしたらよいか。

◎ 考察

各教科のねらいを組み合わせ、総合的な学習活動を行うということは、低学年という発達段階においては非常に有効であり、教科のねらいを達成するだけでなく、それ以上のものがねらえるようである。

低学年の児童には知的理解を求めるよりも、体を使って体得することの方が大事のように思われる。この単元は、内容が子供の生活に密着し、しかも、平常の学習グループを解体して、各自の希望の店の種類別にグループを構成したこととあいまって、自由な発想と主体的な取り組みがなされた。

更に望むならば、より楽しくより効果的に学習を進めるためには、単元のねらいを明確にすると同時に基本的な学習訓練を徹底させる必要がある。

イ 教科の学習の発展として、個性に応じて自由な学習活動（創作活動）を展開し、その活動によって元の教科のねらいを更に掘り下げようとして構成した単元

㊦ 指導案（抜粋） 指導者 2の1 石島 尋子 2の2 久保 敏邦

① 単元名 虫になろう

② 単元設定の理由

理科教材「虫をさがそう」で、児童は、特に虫に対して興味関心を示した。そこで、その発展としてこの単元を設定した。身体的表現（体育・模倣）造形的表現（図工）音楽的表現（音楽）文章的表现（国語）などの創造活動をすることによって、更に虫を細かく観察することになるので、個々の欲求も満足できるのではないかと考えた。また、この創造活動は、個性に応じて自由に選択するという方式をとったので、活動も生き生きしたものとなり、表現力の向上にも効果があるのではないかと考えた。

③ 単元の目標（略）

④ 指導計画

- 虫をさがそう（理科） 4時間
- 虫になろう（合科的指導） 4時間
- 身体表現をしてグループ作りをしよう（一斉） 1時間
- 創作活動（グループ） 2時間（2の2 本時 $\frac{1}{2}$ ）
- 発表 1時間（2の1 本時）

⑤ 本時の指導（題材名 ねらい 略）

- 展開（2の2）（要点のみ抜粋）

具体目標	学習活動	指導上の留意点	評価
虫の特徴をつかんで表現することができる。	1 本時の学習のめあてを知る。 2 グループごとに虫の生活を表現する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 虫の特徴をとらえた作品ができるようにさせる。 ○ 予想される活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 身体的表現 いろいろな虫になりきって、リズムミカルな体の動きで模倣する。 ・ 造形的表現 かきたい虫をどう紙にかくかき方を工夫する。 ・ 音楽的表現 楽器や身近にある物を使って、鳴き方に似た音を作る。 ・ 文章的表现 虫の様子を観察し、順序を整理して書く。 	(省略)

※ 2時間続きの1時間目(前半)のみ、後半は省略

○ 展開 (2の1)(要点のみ抜粋)

具体目標	学習活動	指導上の留意点	評価
協力して発表する。	1 本時の学習のめあてを知る。 2 グループ発表をする。 ① はじめのことば ② みんなで合奏 ③ グループ発表 ④ 先生の話 ⑤ 終りのことば	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学級会の集会活動的に会を進めていくことを確認する。 ○ 虫の声をハーモニカで合奏する。 (詳細は省略) 	(省略)

(イ) 指導の記録 (省略)

(ウ) 結果及び考察

◎ 結果

- 自主研究，自由研究的な立場から授業が展開されたわけであるが，児童は自分で選択した研究という意識から積極的に活動した。
- 発表の場を設けたということから，研究物の制作，発表についての練習なども，グループ内で協力して，ひとりひとりが真剣に学習に取り組むことができた。
- 虫についての研究に深まりがでたのはもちろんであるが，それだけでなく，手段として選んだ各自の活動が，それぞれの教科のねらいに合わせて，そのねらいもおおむね達成されたようである。特に，音楽的表現を選んだグループでは，楽器だけでなく，音の出る種々雑多な多くの材料を用意して，虫の鳴き声を出そうとして苦心していた。

◎ 考察

この単元は，自由研究的な立場から見ると非常に有意義な学習であったと思われる。ただ，これが合科的指導と銘うって通用するものかどうか問題のある単元構成ではなかったろうか。理科の学習については，自由研究，いずれの分野を選択した児童にも共通であるが，他の教科については，国語，音楽，図工，体育とそれぞれ異なるので，問題が残る単元構成であると思われる。

ウ ある教科・領域を中心として，その内容を深めるために，他の教科・領域を合わせて指導し，それぞれの教科・領域のねらいを達成しようとして構成した単元

ウ 指導案（抜粋） 3年1組 本島 慶子

① 単元名 友だち

② 単元設定の理由

3年生もこの時期になると，人間関係，特に友だちとの結びつきが強くなる。しかし，ともするとその対人関係も自分中心になりがちで，自分にとって都合のよい存在としてとらえやすく，都合の悪いことが生じると簡単に，他に移ってしまうという傾向にある。

そこで，この単元は，道徳「なかよしだから」の指導に結びつけるために，その導入として，音楽，国語をとりあげてみた。音楽「きみもぼくも友だち」で導入し，合わせて，「すなおな言葉で」で，友だちについて考えていることを詩の形で表現させることにした。この指導で，音楽，国語のねらいを達成させると同時に，友だちについて，ひとりひとりのありのままの姿をはきださせようとしたわけである。そして，意識のもりあがったところで道徳「なかよしだから」の指導に結びつけようと考えた。

③ 単元の目標（略）

④ 指導計画

総時数 6時間

- リズムにのって楽しく歌おう 2時間
- 友だちの詩を書こう 2時間
- 詩を発表しよう 1時間（本時）
- 「なかよしだから」について話し合おう 1時間

⑤ 本時の指導 (題材名 ねらい 略)

。 展 開 (要点のみ抜粋)

具体目標	学習活動	指導上の留意点	評価
<p>「きみもぼくも友だち」「友だちの歌」を楽しく歌唱できる。</p> <p>歌や音楽に合わせて詩を発表したり聞いたりできる。</p> <p>「友だち」について自分の考えをもったり、人の意見を聞いたりして話し合うことができる。</p>	<p>1 「きみもぼくも友だち」「友だちの歌」を歌唱する。</p> <p>2 本時の学習のめあてを知る。</p> <p>3 グループ内で発表し合う。</p> <p>4 みんなの前で発表する。</p> <p>5 「友だち」について話し合う。</p>	<p>。 2曲とも部分合唱になっているので音程に気を付けて部分練習をさせる。</p> <p>。 友だちについての詩を歌やピアノ伴奏に合わせて発表することを知らせる。</p> <p>。 友だちについてのさまざまな感じ方、考え方に気をつけて聞くようにさせる。</p> <p>。 「きみもぼくも友だち」の歌・曲をはさみながら詩を発表させる。</p> <p>。 友だちのよさ、楽しさに気づかせる。</p> <p>。 ひとりひとりの発言を最後まで聞くようにさせる。</p>	(省略)

※ 以下 略

(イ) 指導の記録

(ウ) 結果及び考察

3年生ともなると、やはり教科としての独立性が強くなり、低学年と同じような意味での合科的指導は、むずかしいように思われる。そこで、ここでは、道徳を核にして音楽、国語を並行して指導したわけである。従って、6時間の指導中、合科的色彩が濃い指導は本時だけというような指導計画になっている。いわゆる、テーマを一つにしてそれぞれの教科の学習を進めるという方法である。

このような指導が合科的指導に含まれるのかという問題があると思われるが、低学年から高学年への橋渡しの段階としては、このような形態も意義があるのではなかろうか。

本時の授業の展開においては、この3つの教科・領域が融合して、楽しい雰囲気の中で学習が進められた。問題点としては、道徳の内容は、「本当の友情は、忠告すべきときにそれができることである」というのに対して、音楽、国語で扱った内容が、友だちをたたえることに集中してしまっただけだったので、その点、指導案作成の上で留意しなければならないということが指摘された。

また、このような合科的指導の形態は、第2期の反省で指摘されたものと同じような形であるが、3年生の場合、1～2年の合科と同様に考えられない面もあるので、この

ような方法も一つのあり方ではないかという見解も出された。

4. まとめにかえて

以上「学習指導方法の工夫改善」という課題のもとに、過去4か年間、低学年ブロックとして取り組んできた概略を紹介したが、研究成果の紹介というより単なる事実のら列にすぎないものである。本当にささやかなもので、いまだにこれといった決め手がかめないままであるのが実情である。

合科的指導の推進ということで、まず年間計画を作成し、それを検証し、改善するという立場から研究実践が始まったわけである。今年度に入って問題点が指摘され、年間計画にとられないで自由な構想のもとに指導計画を作成して授業研究に臨もうと、研究の方法が修正された。

その新しい方法としての実践例を3つあげたが、ここに示した3つの方法は、ほんの一例にしかすぎないものである。また、これが、新指導要領で合科的指導がとりあげられた趣旨に沿うものかどうかについても、いろいろ批判があるのではないと思われる。

無責任な研究記録であるが、いずれにしても、私たちの研究はようやくその緒についたばかりである。更に今後の研究の足場にするという意味でまとめたものである。ご批判いただければ幸いである。

なお、今年度以前に、私たちの研究の一員として研究を推進してくださった方々、及びまとめの段階で研究に加わってくださった方を紹介して結びとする。

- 吉沢 文子(現山前小教諭)
- 安倍 裕子(現名草小教諭)
- 安藤 成子(現北郷小教諭)
- 戸叶美津江(59年1月より)

評

合科指導と合科的指導について、「教育研究」(筑波大附小)のとらえ方に注目したい。「子供以前に教科があって、それに子供を押しこめるのではなく、子供がつくるようになる主体的、自主的、創造的な活動の場を推進したというのが、今日の合科的指導の考え方であろう。教科が先行する合科指導と、子供が先行する合科的指導とは、同じような素材中心の活動になったとしても、その本質においては大変な違いなのである。」と。

本校が、豊かで生き生きした学習を目指した合科的指導をテーマに、子供の生きた生活に即した教育、子供の問題解決の学習を保証してやる実践的研究を継続的に積み上げてきたことはすばらしい。

今後も、低学年における合科的指導については本市においても研究実践を深めなければならない課題であり、その先導的役割を果たす意味からも、理論と実践の統一をめざした研究をお願いしたい。